

鶴丸国永「白き嫉愾の灯」（「華ノ嘔戀 外界ノ章 竜胆譚」より）（抜粋）

鶴丸国永「白き嫉愾の灯」（「華ノ嘔戀 外界ノ章 竜胆譚」より）（抜粋）

『緊急会議』が終わると、沙紀は雑面を外すと、小さく息を吐いた。

沙紀はどうしても、この雑面が苦手だった。

確かに、トラブル防止なのは分かるが——これでは相手の顔が見えないのが……正直、やり辛いのだ。対面しても、何を考えているか分からぬ——。

ずっと『神凪』として、御簾越しにしか巫覠とも会話してこなかつたが……正直、巫覠達が不満を抱いている事には気づいていた。

「……」

沙紀は小さく息を吐くと、そのまま異空間の大会議室の個室から退出する。

そして、鶴丸と山姥切国広が待つ控えの間へと急いだ。

と、誰かの横を通り過ぎた時だった。

突然、ぴんと髪が何かに引っ張られる感覚に見舞われた。

「……っ、痛っ」

思わず、痛みで顔を顰める。

そして、そちらの方を見ると、見知らぬ男性のスリツのシャツに付いているカフスボタンに髪が引っ掛けつっていた。

今日の会議に出席していた『審神者』だろうか。

「あ、あの……」

沙紀が口を開こうとした時だった。

その男性が、カフスに絡まっている髪に気付いたらしく、「あ」と声を洩らした。

「ごめん、引っかかっているのに気付かなくて——」

そう言つて、慌ててその男性がカフスに絡まっている沙紀の髪を解こうとするが……不器用なのか、焦つてゐるのか、解けるどころかどんどん絡まつていって

いた。

「……あの……」

流石に見ていられなくて、沙紀が少し遠慮がちに、

「解けない様でしたら、切つていただきても――」

そう言い掛けた時だつた、

「駄目だ!!」

突然、その男性が叫んだ。

まさか、怒鳴るとは思わなかつたので沙紀の方も
びっくりしてしまう。

時は、数十分前に遡る

瞬間、男性は はつと我に返り、

「あ、ご、ごめん。 いきなり大きな声出して――で
も、せつかく綺麗な髪なのに切るなんて勿体ないよ。

と、とにかく解くからもう少しだけ待つて」

そう言つて、男性が必死になりカフスに絡まつた髪

と格闘している。

そんな様子がおかしくて、沙紀は思わず笑つてしまつた。

だから、気づかなかつた――「彼」が、すぐ傍でこの様子を見ていた事に――。

沙紀に同行していた鶴丸と山姥切国広は、他の「審神者」の刀剣男士と同じく、控えの間で彼女を

待つていた。

鶴丸が持つていた懐中時計を見る。

指針は会議が始まつてから既に三時間以上経過して

いた。

「……今回の、会議は随分長いんだな」

大概、刀剣男士を伴わない会議の場合は三十分、長くても一時間で終わる簡易的な物だった。
何故ならば、『審神者』を政府内で一人にするのは『危険』と判断されているからだ。

の筈、なのだが――。

この事を知るのは一部の上層部の者だけの話だが、なんでも、過去に刀剣男士の目を盗んで『審神者』が逃げた事が何度かあつたらしい。

それは、時間遡行軍との戦いに疲れ果てたからか、それとも、自我を保てなくなつたからか。

ちらりと入り口の扉の方を見ると、何人かの『審神者』が控えの間に戻つてきている。
つまり、会議はもう終わつているという事だった。

なのに、その中に沙紀の姿がない。

どちらにせよ、政府は『審神者』を『本丸』以外で

おかしい……。

長時間一人でいる事を禁じた。

その為、『審神者』が現世へ来る時は、必ず刀剣男士が一人以上護衛という立場という名の監視役として

同行する事になつていた。

それは、『審神者会議』も例外ではなく――。

故に、短時間ではない会議には刀剣男士も同席する。

彼女が逃げるなどまずありえない。

まず、今日は『神凪』のデータチェックの日でもないし、身体検査の日でもない。

いや、きっと少し遅くなっているだけかもしれない。
でも、もし違つたら……？

そんな不安が、鶴丸の頭を過ぎる。

まさか——何かに巻き込まれ——
「鶴丸？」

山姥切国広の声に、鶴丸がはつとする
慌ててふり返ると、山姥切国広が何かに気付いたか
のようだ。

「……どうした？ お前、顔色悪いぞ」
その言葉に、鶴丸が慌てて苦笑いを浮かべながら
「あ、あ、いや、沙紀が遅いなって思つてただけだ」
「……確かに、いつもより遅いが——心配なら様子を見に……」

そこまで山姥切国広が言い掛けた時だった。

突然、がたんっと鶴丸が立ち上がり、

「……俺はちょっと外の様子見てくる。 国広はここで
待つてくれ。 万が一入れ違いになつたら面倒だか
らな」

鶴丸が探しに行つている間に、沙紀が戻つてくる可
能性もある。

じつとしておくのが得策かもしれないが——沙紀の
事を想うと、じつとなどしてられなかつた。

「……わかつた。 気を付けてくれ」

山姥切国広のその言葉に、鶴丸が軽く手を上げて部
屋を出していく。

そのまま今日使われたであう異空間の大会議室の入
口へ、早足で向かう。
その間、何人もの「審神者」とすれ違つたが、その
中に沙紀の姿はなかつた。

やはり、何かに巻き込まれて——。

そんな考えが頭をよぎった時だつた。

「……すみません、まだお時間掛かりそうですか？」

ふと、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

沙紀だ。

それは、あまり心地の良いものではなかつた。

しかも、普段の沙紀なら直ぐに距離を取るだろうが、
何故か今日は距離を取ろうとしない。

それも、時折笑つている。

「……

彼が「人」だから、か……？

鶴丸は慌てて曲がり角に身を隠した。
誰かといふ……？

俺は「刀」で「人」じやない……。

単に「ひとのかたち」をした、「刀」だ——。

そつと、そちらをみると見た事のない男と一緒につ
た。

おそらくこの度の会議に参加した「審神者」の一人

だという事は容易に想像付いたが——。
そうだ。

最初から願つていた事じやないか——。
『沙紀には人として、幸せになつて欲しい』——と。

二人は、かなりの至近距離にいた。

何故、あんな近くに？

なんだか、胸のあたりがもやもやすする。

そう思つたから、俺はあの時彼女の傍を離れる事を
決めたんじやないか。

「偽物のひと」である「刀」の俺ではなく、「本物の人」と幸せになれるようにな——と。

でも——。

沙紀は言つてくれた。

『今、私の目の前にいる、りんさんが……鶴丸国永が傍に居てさえくれば、私は……それ以上は望みません……』

『いいえ、私の目の前にいるのは、鶴丸国永という男の「人」です。モノではありません。そして、ずっと傍に居て下さったのも——貴方です』

そう言つて、涙を流してくれた。

傍にいて欲しいと。

俺が、いいのだと。

俺でなければ嫌だと——だから、俺は——。

「…………」
違う、俺は……。

俺は、沙紀が——。

きみが、「人」を選んで幸せになってくれるなら

俺は、ずっと彼女を見護ろうと——。

本当に？

今の俺は、本当にそう思つているのか……？

この胸の内に眠る様などす黒い感情は？

嫌だ。

きみを、沙紀を俺以外の誰かに渡すなんて——。

彼女が自分以外の手に触れられるだけで、こんなにも醜く黒い「感情」が込み上げてくる。

嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。

「沙紀……」

これが何という感情なのかなんてどうでもいい。
きみが、沙紀が他の誰かのものになるのなんて
見たくもない。

Sample